実践事例４

１　研究テーマ

「『自画像』をテーマとした鑑賞の授業による連携」

２　テーマ設定の意図

中学校美術の授業において、鑑賞授業の確保はもっとも関心の高まっている課題である。新学習指導要領においても、改善のポイントとして「鑑賞においては、よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取ったことや考えたことなどを自分の価値意識をもって批評し合うなどして、自分なりの意味や価値をつくりだしていくことができるように指導の充実を図った。また、鑑賞に充てる授業時数を十分確保した。」とある。

本調査研究においては、小学校・中学校・高等学校との連携を通して、児童生徒の作品のよさや美しさを追究する意欲・関心・態度を育成し、「自分の価値意識」に気づく授業を通して系統たてて取り組んでいくことを大切にしたい。また、小学校の「遊び活動」と高等学校の「専門性」を受け、共通した題材設定を配慮したい。このことから、中学美術の実態含め、生徒が「自分なりの価値意識」を探究しやすく、異校種の子どもたちの意見交流できる題材として、「自画像」制作と鑑賞を題材に着目し、鑑賞活動の充実を目指した異校種間の連携の工夫を研究の核とした。

３　調査研究の内容

(1) 第一回研究協力委員会〈委嘱状交付式並びに教科別会議〉

本研究の趣旨を確認し、小・中・高の授業の実態と指導の工夫について意見交換した。鑑賞活動の充実を核として、児童生徒が制作した作品を通じて異校種間の交流ができる取組を考えた。芸術総合高校の協力で、自画像作品展覧会を学園祭で実施できることとなった。各校で年間指導計画を確認して自画像の取組の調整を行う。

(2) 第二回研究協力委員会〈高等学校美術科〉

高等学校の授業を拝見し、専門学科の指導体制・指導方法について研修を行った。小中学校へ自画像の鑑賞授業の高校生をゲストティーチャーとして派遣可能か、実際の指導方法や指導体制の工夫改善の協議を行った。また、自画像合同展覧会についての打ち合わせを行い、出品数や自画像制作の取組について各校の現状を把握した。

(3) 第三回研究協力委員会〈中学校〉

中学校の二学年自画像鑑賞活動の研究授業を拝見し、芸術総合高校の生徒をゲストティーチャーとして生かす取組を研究した。ゲストティーチャーは、授業者のアシスタントとして事前に中学生の自画像を芸術総合高校の鑑賞授業の中で批評し合い、作品・作者に対する感想や意見を準備して臨んだ。ゲストティーチャーは描くことの楽しさや、個人の思いを解釈し、わかりやすい説明とともに中学生の作品を批評した。中学生も意見を求められ、自分の表現活動を思い出し、自らの表現意図や思いを語った。

(4) 第四回研究協力委員会〈小学校〉

小学校の６学年自画像鑑賞活動の研究授業を拝見し、芸術総合高校の生徒をゲスト

ティーチャーとして生かす取組を研究した。ゲストティーチャーの配慮点は、中学生に向けた説明以上にわかりやすい言葉で批評ができるよう事前準備を行うこと、特に、作者の性格や伝えたい気持ち（喜怒哀楽）を受け取って、共感し合うことに重きを置いた授業であった。また、年齢差のある高校生と小学生が少しでも親しくなれるよう、授業前にミニゲームを行い、適度な緊張感をもって授業に臨んだ。

4　実践事例

(1) 題材　「小学校・中学校・高等学校自画像合同展覧会に出品しよう」
県立芸術総合高等学校と飯能第一中学校生徒の取り組み

ア　制作日程　　８月１日～９月１日の夏季休業日期間
　　対象生徒　　全学年生徒の中から出品希望者を募る
　　（制作指導日　内５日間）

イ　募集概要　・参加校　小 学 校　２校
　　中 学 校　２校
　　高等学校　美術科１校、普通科１校　計２校
　　・企画立案　高等学校美術科生徒
　　・日程

６月	下旬	企画書作成
７月	上旬	企画書コメント用紙受け取り
８月	中旬	出品者生徒名締め切り
	下旬	招待状受け取り
９月	３日	作品出品締め切り
	６日 ７日	展覧会　鑑賞会
10 月	下旬	作品返却、高校生からの作品感想受け取り
11 月	下旬	校内自画像作品　鑑賞会（美術部）

ウ　９月６日、展覧会鑑賞会感想（参加生徒感想）
① 実際に高校生の絵を見て、どうしたらあんなにうまくなるのだろうと思った。
② 展示してもらって、とてもうれしかった。高校生の話も聞けてよかった。
③ 高校生の人がていねいに話してくれて、絵の描き方などわかりやすかった。
④ もっと丁寧に描けばよかった。次描くときは、もっとカゲとかつけたい。
⑤ 自分らしい絵になったと思う。自分だとすぐ分かってもらえてうれしかった。
⑥ 緊張した。はじめは自分の顔を見るのに抵抗があったけど、みんながんばって描いているなあと思った。
⑦ 芸術総合高校をはじめて知った。高校生の絵を見て、すごく参考になった。高校生になっても絵をかいていきたい。

エ　芸術総合高校の生徒からの作品感想をうけて（参加生徒感想）
① 私の描いた絵に多くの高校生が感想を書いてくれて、驚いた。たくさん良いところを書いてくれていて、はずかしかった。うれしかった。

② 自画像を描くことがはじめは大変だったけれど、高校生の方からたくさん感想をもらって、今はやってよかったなあと思う。高校生の作品みたいに自由なかんじが出せるように次は描きたいと思った。

③ 鉛筆でいっぱいかいてしまい、まっくろになってしまったので、失敗したとおもっていました。でも、一生懸命描いたことが高校の先輩たちにもわかってもらえたのでうれしかったです。

④ 正面の顔をかくのがむずかしかったです。高校生の人たちもむずかしいとかいていて、イガイでした。あんなに上手な高校生でも同じことを考えているんだなあと思いました。

オ　まとめ

本校の中学生にとって多くの作品に触れる機会は、とても生徒を刺激し、よりよく表現しようという関心を高めた。小学生・高校生の自画像を鑑賞し、自画像を描くことで自分と向き合い、自分の新たな一面を発見することもあったようだ。よさに気付くことが鑑賞の能力を高めるが、今回授業者のまなざし以外に少し世代の上の高校生の感受性豊かな批評を通して、生徒のよさや可能性を伸ばす取組となった。一人一人に応じたきめ細やかな指導につながると感じた。

中学生は高校生の作品を身近に感じることができた。課題として、専門学科の高校と中学校の連携を深め、互いの指導体制や指導方法の情報交換を行う機会を確保していくことにある。より多くの小中高校生が交流できる鑑賞の機会がつくれると連携工夫が充実する。展覧会場で鑑賞会を学校間で日程を組むなどの対策を練る事も有意義ではないだろうか。

自画像合同展覧会会場の様子
２００８．９／６，７

高校生との作品鑑賞会

(2) 題材　鑑賞授業　「ピカソ・アラカルト！！－ピカソに挑戦自画像鑑賞会－」

第１学年＊組　美術学習指導案

平成 20 年　＊月　＊日

男子　＊名　女子　＊名　計３＊名

第＊校時　2 階第 2 美術室

授業者　○○　○○

ア　本題材の意図

本校の１学年の生徒は明るく活発な生徒が多く、名画の見方や絵画表現の知識に興味をもっている。中でも写実的な風景や人物描写のよさ、技巧に関心がある。中学１年生の思いとしては、その課題を追究し、自らの作品に生かしてみたいと願っている。これまで鉛筆クロッキーで「自画像」を描く取組を行ってきた。さまざまな角度から自分を見つめ、自分らしさとは何か、人体のバランスや鉛筆表現の濃淡の美しさを通して生命観ある作品に迫るよう心がけた。この制作意欲を抽象表現の学習にもつなげていきたい。本題材は、これらの学習を経て、「描くこと」を通じて、抽象作品のよさや可能性を感じる鑑賞授業とともに、生徒一人一人に応じたきめ細かな指導を目指す。

事前に絵画鑑賞についての意識調査を行ったところ、1年1組では「ピカソの作品のよさを感じる」と答えた生徒が大変少ない結果となった。(35名中１２名)「よくわからない」と答えた生徒には、絵画特に写実表現に苦手意識をもつ生徒も少なくない。ピカソのキュビズムを通じて絵画にこめられた作者の思いやよさ、表現の工夫に関心を寄せることで絵画をもう一歩深く読み解く楽しさに触れさせたい。その過程で小学校・中学校・高等学校の連携を図り、学習に遅れがちな生徒への支援と、専門的な学習に興味のある生徒の支援を行う。本時の学習に向けて、描く楽しみとしてピカソの表現方法で、「おたふく顔の自画像」を実施した。キュビズムの学習を、描くことと見ることの二つの側面から、素描による絵画表現の基礎・基本学習を土台に、作家の画法や人生、作品の学習をし、キュビズム表現の面白さを経験させ生涯にわたって絵画表現の工夫に触る資質を育成したい。

イ　学習指導の目標

○抽象絵画に関心を持ち、意欲的に活動に取り組むことができる。（関心・意欲・態度）

○ピカソのキュビズムの画法を学習し、活用して描くことができる。(発想や構想の能力)

○２つの図を工夫してユニークにバランスよく仕上げようとする。　（創造的な技能）

○参考作品や仲間のスケッチから作者の思いや考え、表現の面白さを感じ取り味わうことができる。　（鑑賞の能力）

ウ　学習指導計画

学習のねらい

① 互いの自画像作品の鑑賞を通じて、キュビズムの魅力や感じたことを発表しよう。

② 自由に多視点を取り入れて、キュビズム的表現を楽しみ、絵画表現のよさや可能性を学習しよう

学校で準備するもの
　ピカソ絵画（複製）、生徒作品
　ワークシート３枚、
生徒が用意するもの
　教科書、筆記用具、

ピカソ[泣く女]　掲示物１

（３時間扱い）　　※本時３校時

時	学習活動	学習内容	評　価　規　準
1	・ピカソの「ゲルニカ」「泣く女」鑑賞 ・自画像 　スケッチ	・キュビズムの学習 ・自画像の表現学習 ・写真をみて、自分の顔正面、横顔のスケッチを始める。	○関心を持ち、鑑賞した印象を豊かに話すことができる。（鑑賞の能力） ○制作意図や手順を理解できる。（関心意欲態度） ○自ら表したい内容を考え、スケッチすることができる。（発想・構想）
2	・キュビズムの学習 ・スケッチ	・正面、横顔のスケッチを再構成する。 ・着彩（色鉛筆）で仕上げる。	○スケッチで特徴を捉えて描ける。（発想、構想） ○「切る、構成する」を試行できる。（創造的技能） ○鮮やかにのびのびと色を重ねて、仕上る。（創造的な技能）
3	・鑑賞 （生徒作品とピカソ作品）	・互いの作品を鑑賞し、意見交換する。	○ピカソの作品におけるキュビズムの学習を深め、さまざまな表現方法を学ぶことができる。〈本時の評価規準〉（鑑賞の能力）

【参考】

ピカソ「静物」

ワークシート１の取り組み
（埼玉県立近代美術館発行）

エ　本時の学習

（１）目標　　意欲的に自画像作品鑑賞し、印象や作品に込められた思いを感じ取ろう。
キュビズム表現の工夫や作品意図を知り、絵画表現の工夫を学習しよう。

（２）展開

学習活動	学習内容	☆評価規準及び評価方法と指導の手立て ◎満足いく成果の生徒への手立て △努力を要する生徒への手立て
本時内容を確認する。（５分）	ピカソの絵が「多視点」な絵であることを復習させる。	☆ピカソの絵の中で、キュビズムの描き方について工夫している点を見つけ、ワークシートを使って振り返り確認できる。
「ピカソに挑戦 - 自画像制作 - 」の生徒作品やピカソの人物画を鑑賞する。 （３０分） 	参考作品を鑑賞し、ワークシート１で、人物の特徴や性格について感想をまとめさせる。 一人１作品の感想を付箋にかき、作品余白に添付させる。 仲間からの感想を読み、自分の作品の努力点について感想を書く。	☆仲間の作品やピカソ絵画のよさ、工夫を感じ取りながら、鑑賞し、味わうことができる。 評価場面１ ◎積極的に学習内容を理解し、自分の意見をかくことができる。 △仲間の考えを聞き、相談してよさを味わう努力をする。 異校種間の連携配慮点 この時までに事前に「ピカソに挑戦自画像」を小学校や高等学校の児童生徒に鑑賞してもらい、感想を集めておく。クラスの仲間の感想とあわせ、配布をする。
・キュビズム時代のピカソの作品をみて描かれている人物の思いや感情を想像しまとめる。 （１０分）	「多視点」で描くキュビズム時代のピカソの柔軟な発想力に気づかせる。 ワークシート２に「多視点」で描くキュビズムの考え方を再確認する。	評価場面２ ◎ピカソの絵について、資料等をもとに、自分なりの意見を持っている。 △多視点なまなざしで絵が描かれていることで表情が笑ったり怒ったりして見えることを助言する。 ☆ ワークシートに発見したこと、あらためて感じたことを記入させ、ピカソ絵画に親近感を持たせる。 ☆ 仲間の視点を大切にし、感じ取ったことを話しあって、確認することができる。
学習のまとめ （5 分）	自己評価シートで振り返る。	☆ピカソの絵画を鑑賞し、絵画表現に関する興味を持つことができたか振り返りができる。

オ　評価

・積極的にピカソの作品を鑑賞できたか。

・仲間との話し合いを通して、絵画表現の工夫を発見できたか。

ウ　参考文献

・『制作と鑑賞の交流アイデア２３選』明治図書

・『月刊たくさんのふしぎ　顔の美術館』福音館書店

・『もっと知りたいピカソ 生涯と作品 (アート・ビギナーズ・コレクション)』東京美術

・『あーとぶっく③　ピカソの絵本　あっちむいてホイッ！』小学館

・埼玉県立近代美術館「ピカソ　静物」ワークシート

5　分析と考察

(1) 中学校と高等学校の連携

自画像の作品を展覧会に出品し、鑑賞したことで、高校生と中学生の交流を通して互いの創意工夫に気づき批評し合うことが、発展的な学習、補充的な学習につながった。

高校生のゲストティーチャーを迎えた鑑賞授業では、徐々に中学生の活発な発表の姿勢が見られてきて、よりよい意見交換の様子が見受けられた。いずれも各校での鑑賞授業で、互いの作品のよさや可能性を伸ばす意見が発表できるよう指導が必要であり、対面させたときの違和感のない授業展開の工夫を配慮することが大切である。本研究で実際に会場校となった中学校での工夫は、地域の特色を生かした高校生の紹介があり、中学生が高校生との出会いを印象づけてとらえることができた。

(2) 小学校と高等学校の連携

高校生のゲストティーチャーを迎えた鑑賞授業では、小学生の創意工夫に高校生が感銘を受けている場面が多かったようだ。高校生が色彩や表情を児童の性格や行動に結びつけ感想を述べることで、学習に遅れがちなこどもへの支援になっていた。鑑賞授業後に行われた小学生と高校生の共同制作「絵巻物制作ワークショップ」もまた、絵画（イラスト）を通じて世代差の感じさせない絵画への憧れや創意工夫を生かしたゆとりある教育活動の展開となっていた。

6　成果と課題

本調査研究を通して、小学校・中学校・高等学校の系統立てた学習指導体制や指導方法を探究した。中でも専門学科の高校生をゲストティーチャーとした取組は、中学校の新学習指導要領「第１章　総則　第１　教育課程編成の一般方針　１」に示された言語活動の充実を図る上で効果があったと思われる。中学校と高等学校の連携においては、「第６節美術　第２　各学年の目標及び内容　〔第１学年〕２内容　Ｂ鑑賞（１）ア」と「〔第２学年及び第３学年〕２内容　Ｂ鑑賞（１）ア〕に沿った内容として、中学校側としては十分な効果が期待できるのではないか。

今後の課題としては、研究に携わった研究校に限らず、各異校種間の連携を取りやすいネットワーク環境が重要と考える。異校種間の美術・図工主任の研修の機会を持ち、児童生徒の成長段階を考慮した鑑賞授業の充実に関心を寄せ続けたい。